

歴博共同研究シンポジウム

[出席者] 発言順

石 上 英 一

狩 野 久

黒田日出男

前園実知雄

森 公 章

山 口 英 男

金 田 章 裕

仁 藤 敦 史

吉田栄治郎

浦 西 勉

服部伊久男

①……………「額田寺伽藍並条里図」の再現と寺院経営

石上（司会） 最初に石上が話したことは、他の方と重複しない範囲でいえば、額田寺伽藍並条里図の復原の意義と、それによって土地利用に関して今までの認識が改められる可能性があること、それから文献史学からみれば、こうした学際的な協力は大変重要な意義があって、ほかの分野ではいっぱいなされているが、おそらく古代史にとってはひとつのエポック・メイキングな出来事だったのではないかということです。山口さんの場合には、中身に立ち入って、内容とか成立について話され、そして永嶋さんは文化財科学の立場から分析のポイントを話して下さいました。それから黒田さんは、絵図自体をどう読むかという観点からもう一度これをどう読みなおすことができるかというお話をして下さいました。これらについて、自由にご意見をいただきたいと思います。

考古学や文化財保存科学の立場からいえば、試行錯誤といいますか、データが増えればどんどん展開を変えるということがあると思います。しかし、文献史学の我々は慣れていないところがあります。また、こういう共同研究で、例えば10人なら10人が共同でひとつの見解を求めるといふことは我々は慣れてなくてですね、一人でやったほうがよいという気持ちがある。しかし、10人なり十何人かの皆でひとつのことを考えたほうがよいという、そういう場だというふうに思います。ですからどこまでが自分の意見かということなんかはあまり気にしないで、自由に議論して下さい。

狩野 全くおっしゃる通りです。この研究会でもいろいろ勉強させてもらっているわけですが、石上さんの言われるように、これまでのカチカチの国家的土地所有論から初期荘園論へ向かうという土地所有論の展開図式は実態にはそぐわない。これは確かにそうなんですけれども、石上さんがいちばん前提にされたことに何か敢えて言うようですが、律令が掲げた理念というんですか、その支配意識というか、それはやっぱり国家的土地所有であるべきものであるという国家理念があったことはまちがいないんだと思います。ただ、その点に引きずられて、我々があまりそこから実態論を議論してきた為に、へんな事になってきているんだと思うんです。そういう大きな話はとにかく置いてですね、額安寺のような規模のお寺で、果たしてどの程度の寺領を予想することができるのでしょうか。想定が実態論としてどの程度今迄の研究でできるのでしょうか。額安寺についても色々なお話がありますが、私はその辺のところはね、実態論を考えた時にはまだ全然見当がつかないのですけれども。そういう事について何かお考えのある方があれば、ちょっと教えて頂きたい。見通しというか、そういう事についてどういう事を考えた方がいいのか。つまり、お寺とお寺の周りぐらいのことなのか、もっと全国に額安寺の所領があるのか。これは中世の額安寺の所領なんかとの比較も当然いると思う。そこから額安寺の規模なり寺のイメージをつかみたいのです。弘福寺なんかと比べてどうなのかとか。

黒田 古代と中世では全然違うんじゃないですか。

狩野 いや、そんなに違うというイメージで捉えていいのかな。確かにお寺の規模は、違うかもしれませんが、これは前に前園さんや上原さんに古代額田寺の規模についても説明してもらったわけですが、もういっぺん復習することからはじめてもよいと思うのですが、どんなもんだろう？

前園 あまりしゃべると明日しゃべることがなくなるので少しにしておきますが、8世紀代のここ

に描かれている絵図の伽藍が、創建時の額田寺と同じものかどうかということについて若干疑問を持っています。その辺の事は明日少し論じてみたいと思うんですけども、ここに描かれている1町四方の規模であれば、先程の山口さんのお話とも関連しますが、おそらくこの絵図が完成するのは、この地域の伽藍がちゃんと整った時期ではないかと思います。そうすると8世紀の第2四半期頃から中頃にかけてのことじゃないかと瓦の状況などから思います。8世紀のその時期に1町四方の規模を持った寺というのは、まあ具体的に比較することは今ちょっと資料を持っていませんのでできませんけれども、さほど大きいものではないんじゃないかなという気が印象としてはします。

狩野 どのくらいの規模を考えたらいいのでしょうか？

石上（司会） これはお坊さんの数の問題もありますね。僧房は描いてあるのは一つですけども、僧房らしいものは他に三つあります。まあ1棟に3人以上とすれば10僧ぐらいいるのかも。実際はそんなにいないかもしれませんがね。私度僧ですかね。東大寺の開眼供養の時は万僧供養ですからね、当時僧はけっこう多くいたわけです。森さん、いかがですか。

森 前にお話した時に、広隆寺の資財帳が関係するのではないかという事で説明しましたがけれども、今日はその平安遺文の史料を、持っていないのでうろおぼえですけども、広隆寺は寺院の周りの土地が60町ぐらいあって、それ以外の畿内や畿外の土地はたしかなかったと思うんですね。この額安寺もやっぱりイメージとしては、この寺院周辺地だけで、ちょっとそれ以上、例えば畿外に土地を持っていてそこに出先を作ったりして経営するという能力は、額安寺が額田部氏の氏寺的要素が非常に強いとすると、ないのではないかというような気がします。額安寺は畿内のいわゆる中小豪族の氏寺で、寺院の周りの丘などを取り込みつつ額田部氏の財政基盤とも重なり合いながら、こういう規模を持っているんじゃないかというようなイメージがありますけれども。

狩野 そうすると、この図面にだいたい描かれているような規模になるわけですか。これをもうちょっと周辺を含めたぐらいいのがひとつのイメージですか。

石上（司会） 水系からいったら西町の周辺までですからね。岡崎川の東の方までです。小手ヶ池の灌漑地は。

山口 書いてある面積を合計すると、この寺院というのが5町1反ぐらいあります。6坪分ぐらいにまたがっていますけれど。寺田というのが、3町8反ほど。それから寺畠が3町7反、寺岡が9町5反。その寺岡に囲まれている内部が10町分ぐらいになりますが、ここの面積は記載がなくてわかりません。それから寺林が7反、寺栗林が7反と少し、寺楊原というのが1町5反といったところです。ですから、この図の面積を集めても、60町などという広さにはなりません。

石上（司会） まあ寺領田畠で要するに10町でしょう、たぶん欠失部分も含めて。もっと南にあるかもしれないですけどね。弘福寺でも最盛期で200町ですから。その20分の1でしょう。

狩野 そういえば寺の周りにいわゆる郷で額田郷というのがかなり広くある。そういうものの中には寺領は？

石上（司会） 周辺の農民に出挙していますからね。だから直接の寺領ではなくても、出挙の利稲が入るのではないのでしょうか。科学的にやるんだったら、官大寺など、まあわかる範囲で封戸とか寺領の田畠だとか、それから僧の数だとかで計数を出して、それに対応してどのくらいの本材量のお寺が作られているとか、不可能ではないんですよ。総エネルギーで算出することは。誰もやっ

てませんけれど。規模が小さくなれば格段に容易になる。例えば近世の村なんかだったら、今の小字ぐらいでお寺を持つとかありますね、裕福な農村地帯だったら。まあ、その人たちの信仰心ということもあるから。今だってそうですよね、財産はたいてもお寺に寄進する人もいれば、遊蕩に使う人もいるし。

山口 石上さんが最初に言われたこととは逆になりますが、一方で各個の分野にこもって戦いを挑むと言いますか、それが無いとお互いの理解もできないということでもひとこと。黒田さんの言われる絵図の読解ということは、色々と非常に学ぶべき点があり、私の報告でもそういうことに近づきたいと思っているわけです。そこでひとつ問題となるのは、この図の中に条里プランによる土地把握が絡んでいること、これをどう考えるかという点です。図だけを見て、その中での空間把握を検討するということはできると思いますが、ただこの図自体に条里プランの枠に従わざるを得ない部分があるとすると、そのあたりはどのようなものかなと思います。それからもうひとつは、さきほどの寺院の建物の話になりますが、私はこの図の中に書かれている文字記載とは、田図なり田籍なり元になった資料に書かれていたことしか記載されていないのではないか。図の説明として文字を記入したというのとは違うのではないかと考えています。土地の名称や面積などの記載についてはそうだと思いますし、そういう意味から見ても、寺の中の建物の描き方には気をつけるべき点があるように思います。ただ田図・田籍に建物は描かれていないでしょうから、何か別の情報があるのではないと思うわけです。黒田さんは、建物の名称の有無について指摘されましたが、たとえば僧房については、一つに僧房と記載してあとは省略したとか、正倉も細長い建物に一つ書いてあとは書かなかったというように考えて、それと内院の部分などを除きますと、中心伽藍では南大門と中門と金堂と講堂、これだけに名称がないのではないかと考えているわけです。

黒田 あのね、それはもちろん前の時もそういう話になってわかってるんですが。そうすると右側の区画に倉や何かをいちいち書き込んでいる意味がよく分からないのですが。

石上（司会） 資財帳に載っているからだと思いますけどね。

黒田 そうすると全部ですか？

石上（司会） この中心伽藍はほとんど不可侵ですよ。その周りのそういう雑舎は資財帳に登録してあるのをそのまま書いておかないと危ないからだだと思います。だから資財帳と班田図と他にもあるかもしれませんが、合体してできた図だと言えないでしょうか。

黒田 そうすると、資財帳というのは典型的にはこういう倉を一つ一つについて書くような形がたくさんあるのでしょうか。そして、それらをこのように図上に記載する必要があるんですか。逆に言うとね、正倉と他の倉々の差異をどのように理解したらよいのかということに疑問があるのです。

石上（司会） 何故、絵を写したかということですかね。

黒田 ええ、まあそれに戻ってしまうかもしれませんが。四つの長方形つまり僧房らしき建物についても同じ議論になるんですか。つまり、そのところが非常にあいまいなところであるので……。

石上（司会） 中門だとか金堂だとか五重の塔だとかは書かなくても分かる。

狩野 それはもう大前提。あえて書かなくてもわかるから。

石上（司会） 食堂は書いてありますね。

黒田 ええ、食堂は書いてあります。

石上（司会） 食堂と食殿というのはどう違うのでしょうか？

黒田 その二つの違いも、これも書いてあるものについて言うと、確かに何かがあってそれを写したというふうに言えば済むのでしょうかけれども、どうもそれだけで済むかなあということがあって、こだわっているわけです。それから、先程の話でいうとね。条里の枠組みというかグリッドとかあるいはメッシュとかいうか、それがベースになっていて、その上に絵が描かれていることは一見して明らかですね。だからそのことについては、この絵図について条里制のメッシュとか枠組みがこの絵図を描く上でのベースになっている点では、中世の大部分の絵図とは違う訳です。ですから、こういうタイプの絵の表現、絵画表現的なものをおさえるときには、そのベースになっているものについては、それを古代絵図の特性として一応おさえておいてもいいだろうとは思っている。しかし、他面、中世荘園絵図の空間的把握・表現との共通性とか類似性を視野に入れておきたいと思うのです。

石上（司会） この図は条里地帯の中にぽっかりと丘という非条里的なものが描かれている。周りが全部条里地帯で方格図で描ける所に一円の所領を描くというようなそういうふうなものが、中世荘園図でありますか。

黒田 本当のパターンではないでしょう。

石上（司会） 鵜荘とか足守荘とかの図ですね。

金田 足守荘図の表現は条里プランとしての意味が明確でない。

黒田 そうすると鵜だけになってきますね。あとは尾張国富田荘の場合でしょうか。

山口 黒田さんが言われるような空間の形式とか、そういう趣旨はこの図にもあるのかもしれないと思います。けれども、そうしたものをこの図から読み取るときに、例えば条里プランが存在しているために、不連続な描き方になっていたりしないだろうか。あるいは、例えば田籍によるところはもっと小さい面積になっているというようなことを言っても、そのところは条里プランがどのようなになっているか考えないと実際のところはわからないということがある。それから、そういう空間認識が現実にあって、連続性の境界があるとしても、それが条里プランを経て図の上にそのままうまく表現できるのだろうかという気がします。

黒田 ただ、条里を抜きにしても、この絵は描けていますよね。むしろ条里を無視している部分もあるくらい。絵画的にひとつの地域を描いていますよね。だから、そのところである種の相対的に独立した地形表現とか、あるいは空間表現になっているところを生かして読んでいく筋が一方であるなどと思ってます。だから、もちろん条里から出発して、要するに一貫して詰めていく読み方もあるだろうけれども、こちらの読み方も捨てないほうがいい。むしろ、そっちから読んでいって、逆に条里という枠組みに帰結するような読み方で、ひとつの筋が見えてくるはずだというふうに言いたいだけなんですよね。だから、そのズレはむしろ数字を書くことによって糊塗していたりしてるでしょう。我々が今でもやろうとしている数値、枠を作っておいてね、その枠の何反だったらそれにそってこれぐらいというふうに量的に、300歩だとこの程度という形で縛られた絵ではないんですよ。そうじゃなくてかなりノビノビと、いわば地形表現を形として読み取って描いている。そのところを重視しないとこの絵図は読めないと、僕は思っています。では、そこら辺の齟齬をどう調整しているのかといわれれば、位置指定については坪を越えてごまかしてはいない。

ウィンドウズじゃないけど、自在に区割したりして、位置を変えてないんです、そういう意味では。だから、そこでつながってるんですね。あと強制的に非常に強く働いているのは文字による面積表現であったり、地名表現であって、それが全部を調整しているわけ。

石上（司会） 話は変わりますが、額安寺文書の中にある西山は、この図では九条三里の九の坪とか十の坪あたりの山並ですね。狐塚古墳の東側に西山と呼ばれている所がいまあります。そこを祭祀しているっていうのが、額安寺文書の中に出てきますよね。船墓には額田部先祖の墓と書いてあって、狐塚古墳も墓と書いてある。船墓の場合は道の前ということがあるんでしょうけども、松の木みたいなものが生えています。奈良時代に先祖の墓として古墳を祭祀しているというのは、考古学的に事例はどうなんですか。

前園 それは、土地の人がどの程度まで祭祀していたのかということは非常に重要なことになってきます。発掘調査しているときに、ひとことで言って、ほとんどその痕跡がない。ただひとつ実例を挙げますと、斑鳩の法起寺の北の岡の上に瓦塚古墳というのがあります。100メートルの前方後円墳で、これが古墳時代中期の5世紀代の前方後円墳で、そこに奈良時代だったかな、飛鳥時代だったかな、7世紀から8世紀ぐらいの須恵器の一群が墳丘の麓から出てきました。それについて、一部ではそれがもしかしたら祖先の祭祀かもしれないという意見もありますが、それは非常に稀な例で、はっきり祖先の祭祀が行われていたという確実な例は、私は知りません。

石上（司会） この間の黒田さんのお話ですが、額田部先祖の墓の前の木っていうのは、祭祀に関わる木と考えてもいいんじゃないですか。

黒田 ええ、特別な地域という可能性を留保したいというふうに。表現の一義性という意味でも凡例的な規模表現はそう簡単に成立しないですから、こういう場合についてどういうふうに理解したら良いかは、全体表現の分析に支えられて読むしかないと思います。

石上（司会） そもそも他にも同様の絵図がいっぱいあってね、たまたま残っているのか。他にもいっぱいあったのかどうか……。

黒田 何が？

石上（司会） こういう絵図は、定額寺とか氏寺とかがほとんど持っていたが、真言律宗や西大寺がこれを大切にするとかいうことがあって残されてきたのか……。

黒田 仮説的にはあったと理解したい、それは。

山口 寺院の伽藍を描いた図は、山堺四至図が東大寺図と呼ばれているように、かなり一般的だと思います。西大寺の資財帳の中にかかなり出てきて、阿弥陀山寺図とか秋篠山寺図などがありますし、安祥寺の資財帳などにもあります。けれども、そういう図の典型的なものとして山堺四至図を考えると、こういう寺領などは入っていません。ですから、どちらが一般的なのかという問題もあるのではないかと思います。私は、他の例などを見ると、一般的なよくある図なのではないかという気がします。

石上（司会） 古代の荘園図というのは、東大寺が二十数点あり、大部分を占めている。それからあとは京北班田図は西大寺の寺領相論図です。それからこの額田寺のも西大寺末寺のお寺の図です。あとは葛野郡班田図は東寺領の荘園図です。残っているのは本当に限られた所のものなんですよ。結局、他にほとんど残っていないから、文書目録なんか残ってても少ないですから、他の所がない

かどうかということですね。それが一番考えることで、僕はいっぱいあったんだと思うんですよ。だから特殊なのか。信仰のことで特殊性もあるんでしょうが。こういうものはなにも額田部氏だけでなく、一般的に作っていたのではないかな。残ったということに関しては、やはりこれは西大寺系の関係のお寺の伝統と関係ありますか。

狩野 条里の方格との関係もあるんだけど、山口さんがいちばん最後に付けておられる現地比定試案。これは現存の地割やら、1300年後の今日確かめられる地割とその方向を示したものです。古代に遡っての額安寺の伽藍の中軸線というのは、これは今日おさえられていない？ いま現在のお寺の向きはわりと南北の方にとっているのかな。この現地比定試案だと、今お寺がある所あたりは方位はふれている可能性がある試案なのか？

山口 ええ、そうなんです。寺の西側の地割がやっぱり振れていますので。

狩野 西側ね。

山口 そうすると、北側にある今の道がやはり傾いていますから、それにちょうど合いそうな感じなので、とりあえずこうしておこうということです。

石上（司会） 申し訳ないんですが、お話の途中で。次の。まだ明日もありますので、とりあえず最初の第1部をここで終りということで、休憩して第2部の方へ移りたい。

②……………額田部氏と飽波評・条里制

狩野（司会） 森さんと仁藤さんの船墓の先祖についての理解の違いもあるんじゃないかという事もございますので、あるいはこの地域をめぐる歴史的な環境、古代の歴史的な環境の問題、明日のパートでは考古学のほうの説明もありますけども、そういうものとの関連でのご発言でも結構だと思います。どうぞ自由をお願いいたします。

森 仁藤さんの額田部比羅夫とか「推古紀」の額田部連は、系譜としてはどの程度お考えになっているのでしょうか。いわゆる賀茂系じゃないんですか、これは。

仁藤 推古紀の額田部連は賀茂系ではないと考えます。

森 賀茂系ではなくて天津彦根系、要するに額田部湯坐連とか額田部河田連と同じか、額田部湯坐連が額田部連を名乗っていたか、それは同じですか。

仁藤 はい。天武13年の改姓から天平宝字2年（758）の改姓までの間については賀茂系のほうが比較的優勢な時期ではないかと思います。どちらかが完全に滅亡することではなくて相対的な問題として、その時期は賀茂系すなわち明日名門系が優勢ではないかと、そういう理解です。

森 要するに額田湯坐連も六国史のあとのほうにも少しでてきますから、全くなくなった訳ではありませんし、だから基本的にここにいる額田部の系統というのはいわゆる賀茂系ではなくて、推古紀の額田部比羅夫とか、とにかくまあ広い意味での同族というか。

仁藤 地縁的・血縁的には親しい関係であると思われます。

森 ですから、賀茂系がここに居たと考えているのでは全然なくて、要するに仁藤さんと同じように額田部比羅夫の系列がまさにこの額田部丘陵に関係する豪族だというふうに考えています。広い意味で額田部比羅夫、額田部連ですね、それと額田部湯坐連と額田部河田連、この三つは一応同族

であって、このあたりを本拠地としていたことは間違いないんです。その点ではこの地域を考える上では、「推古紀」に出てくる額田部比羅夫の役割ですとか、額田部河田連の持っている性格なんかを、重視する点では同じで、この地域を考える上ではそのあたりは問題ないですね。ただ船墓、額田部宿禰の先祖というのがでて、いわゆる額田部宿禰が額田部河田連なのか……。私はですから、額田部比羅夫の系統が額田部丘陵の中にずっと続いていて、額田部河田っていうのはもう少し西へいった山辺郡額田村でももう少し離れたあたりで、額田部氏を構成する中での、とくに馬具なんかを管理する武力面での職種を持ったやつで、嘉幡村とかそのあたりを本拠地としている氏族かなと思っています。ですから額田部比羅夫の系統を引くのがここにでてくる「額田部宿禰先祖」の事かなあというふうに考えている、そういう違いだと思うんですよ。

仁藤 基本的には今の説明で宜しいと思います。同族集団の中でも時期、時期によって有力になる者がいます。坂上氏のように東漢氏の中でもいくつかの系統の盛衰があります。氏族全体の中ではその時々によって有力になるものと、比較的衰退するものと、波があるだろうと思います。そういう事を微視的に見ると、私見のような議論も成り立つ可能性があるということで今回のお話は申しあげました。系譜を峻別するならば、絵図に宿禰とでてくることは極めて不可解といえますか、説明がつかないんですね。他の資料との整合性からいうと、宿禰ということにこだわれば、明日名門系というふうにストレートに考え、『姓氏録』との整合性からいえば、勢力の交替があったのではないかと考えたわけです。

狩野（司会） 今の問題に関連してのご意見でもいいし、違う問題でも結構です。

仁藤 ひとつ補足しますと、さきほど地縁的なお話がありましたけれども、『姓氏録』の大和国神別の額田部河田連を見ますと、二つ後に奄智造があります。その奄智造が同祖として出てきます。さらに『姓氏録』の左京神別下の額田部湯坐連を見ても、同じように額田部湯坐連の同祖として奄智造がでてきます。地縁と血縁が密接な関わりを持って出てくる事例になるかと思います。

前園 先程の条里図の額田部宿禰の墓のことですけど、この図の中ではいちばん北の端ですね。いちばん丘陵の中でも目立つ所にある。実は時期は調査していないのでよくわかりませんが、6世紀の前半と見られるもので、規模はさほど大きくない、30メートルぐらいの前方後円墳。その手のものは6世紀前半では各地の郡単位の郡長クラスの人ではなくて、もう一段階下ぐらいのクラスのもので、それで、この場所が額田丘陵のいちばん目立つ場所にあるということとの関わりですが、おそらくこの条里図を額田部氏が作った時に、結論を申しますと、仁藤さんのお考えに近いんですけど、やはりこの時にきめたんじゃないかと思うんですよこの名称は。元々それは直接額田部氏とはかわりのないもので、最も目立つ場所にあるのを船墓、それを額田氏の祖先の墓ということであえてここに書き込んだのではと思います。支配を正当化するために。それがひとつと、それからそのことに関してさきほども仁藤さんからも話がありました、飛鳥時代、奈良時代に、古墳の祭祀をどういうふうに行っているかということと関わってくるんですけど、それは私の知る限りほとんど例がないです。だから、古墳については、僕はよく言うんですけど、古墳時代とは、極端に言えば墓が墓でなかった時代であると。古墳というのは墓以上の機能を持っていた、政治的な機能も持っていたので、その機能がなくなった時に古墳が終る。だから、そういう意味で古墳の祖先祭祀というのは、あまり一般的に行われてなかったと考えています。だから伝統的に日本では

古墳の祭祀、後世にいう祖先の祭祀っていうのは行われていなかったというのが考えられます。そういう意味でこの場所は約200年から250年の差がありますよね、実際の古墳の時期と条里の時期とは。だから、これが自分達の祖先の墓だという伝承はおそらくなかった。だからその時点で、古墳は古墳ですけど、先祖の墓として見てこの中に書きこんだのじゃないかというふうに思うんですけど。

金田 あとでお話することとちょっと関わるんですが、黒田先生のおっしゃいました条里のくい違いの話ですが、くい違いが2種類ある訳ですね。ひとつは地割そのものについてですね、もうひとつは呼称体系のくい違いですね。地割そのもののくい違いに関しては、これはやはり考古学的な調査を待たないと本当にかつてくい違っていたかどうか、あるいは洪水のあとで直したかどうかというような事はわかりません。時期の問題もありますから、それはちょっと別問題じゃないかというふうに思っています。呼称体系のほうのくい違いのほうの方が実はより重要です。これについてもいろいろな考え方は、平群郡の条里プランと添下郡の条里プランとがくい違っている理由を、平群郡のほうの状況から考えようとしているという事です。今迄の考え方は。というのは、平群郡の条里プランは、パターンとしては山辺郡やその南の方と全く一緒なんです。郡境から始めてる訳ですから。これは全然問題ないわけで、むしろ東西でくい違っているのは添下郡なんです。だから添下郡のほうの検討をしないと、このくい違いの理由が出てこないと思います。ですから、私もまだ成案があるのではなくて再検討しようと思っている段階なんですけれども、添上郡と添下郡のそれぞれの京南条里がなぜそこでくい違っているのか、という発想で検討しないといけないと思います。添下郡と平群郡とがくい違っているというのは結果であって、平群郡の条里は全然異例ではない訳です。条里プランとしては。山辺郡と里の堺線と条の堺線は続いている訳です。元々つながっているんです。だから大和全体からすれば別に異常ではない。ところが、むしろ添上・添下郡京南条里の呼称体系のほうはややズレている。

狩野（司会） 条里呼称からいうと、そういうことなんだけれども、さっきいわれた、いちばん最初の地割の問題で言いますと、例えば平群郡の七条一里、平群郡の八条三里、ここがね添下郡の関係で、こんな所にどうして郡界がくるの。

金田 そこに郡界がなぜあるのかというのは非常に大きな問題だと思います。例えば磯城の上と下の間でも中ツ道の関係で条里プランの里堺線とは全然違う所に郡界がありますから。ただ平群郡の条里プランというのは、そこに郡界があるからそこから始まっているという形で理解をすれば、全く異例ではない訳です。なぜそこに郡界があるのかということはもちろん問題です。その問題と同時になぜ添下郡が東側の添上郡とくい違ってるのかという問題設定で考えるべきだろうと思っています。それで、予測的に申しますと、京北条里がやはり平城京の京城との関係で、不連続の形で設定されていますから、私は添下郡のそれは京北条里と一体の形で理解をしたほうが良いと言えるのではないかとと思っています。続いているという意味ではないのですが、設定された段階での状況として。

狩野（司会） 添上と添下の1町のズレの問題はむしろ上からの問題で、北側、つまり始まる所からの違いでだいたい説明できる？

石上 要するに南の横大路から、北に割り振っていくから、南の方は合っていて、西北の部分は1

町のズレが生じているのは二次的だということでしょう。今、言われたのは。

金田 いや、それがはっきりわからないんです。つまり北側の横大路、あ、南の横大路か、そうですね、南の横大路をベースと考えれば問題ないわけです。それが平群郡まで来ていることになる。

石上 その時にこのふたつ、要するに2里ズレて1町幅のズレを生じさせた理由というのは何かということですね、狩野さんが知りたいと言っているのは。

金田 そこが問題です。非常に難しいですね。

狩野（司会） 僕は一つの想定ですが道路敷で考える。何らかの下ツ道から入る道路があってこの山へつながっている、そういう夢物語はどうでしょうか。

金田 平安時代ですけど、新しい東海道が、平安京からか長岡京からか知りませんが、ともかく山科盆地の北側の所を東西に直行します。あれは『平安遺文』の史料ですから大分あとの話ですけど、1町幅が大路なんですね。1町幅が大路というふうに設定した上で、さらにその中の1反の幅を実際の道にしています。だから、その大路というふうな設定は1町幅でとっているんですね。あれは面白いですね。

狩野（司会） 足利さんが……。

石上 これ、それだったら額田部丘陵から真っ直ぐ西に行ったらいいはずでしょう。それの方がわかりやすいでしょう。

狩野（司会） 真っ直ぐ西？ それはやっぱり飽波の土地が何らかの事情で意識されているのではと思っています。

石上 そうすると、北の横大路の延長というのは、どういうふうにして法隆寺のあたりを通過していくことになるんですかね。

狩野（司会） この辰巳さんの復原図は一応の皆さんの考え方をもとにしてこんなのが出来てるでしょう。

石上 途中から斜めにいってしまう？

狩野（司会） え、竜田道？

石上 さっきのお話では、北の横大路から西南に斜行していくというふうには、早い段階で分岐してしまうということですか。

前園 私もよく整理してませんが。飽波の「飽」ってありますよね。あの位置ぐらいまでは道幅は広いと思うんですよ。そこから東はよくわからないんですよ。ちょっと。

石上 これ、いろいろな時代のものをひとつに書いてます。これ、法起寺と法輪寺の間の丘の所にあたってしまうから。

狩野（司会） 下ツ道と佐保川の間の平群郡の九条一里とか十条一里、十条二里とかというような所には、条里関係の資料がね、出てこなくてね。

山口 金田さんのお話の路東条里と路西条里ですが、平群とか路東条里のほうが潜在的にあるということでしたが、里の境界についてはわかるんですけども、条の数は路東と路西で一条ずつずれています。それでいくと、平群はやはり添下の方とあわせているのではないかな。そうすると、添上と平群との間に一体である中での違いがあるような気がします。路東と路西で条の数え方がずれるのは、どういうところによるのでしょうか……。

狩野（司会） 呼称はあとからなのかね。

石上 地割が何しろ藤原京を基準にして作っている。

金田 呼称が出来た時期の問題と地割ができた時期の問題と両方あって難しい。ただ地割と呼称をちょっと分離して考えないとややこしい。

狩野（司会） 他にございませんでしょうか。ないようでしたら、このへんにしたいと思います。

③……………中世以降の額田部地域

黒田（司会） 吉田さんの方から、①近世額安寺の経営と村方（額田部寺方）、周辺地域とのかかわり、②板屋ヶ瀬浜経営と額田部新町成立とのかかわり、あるいは額安寺の経営との関係、③額田部西宿に系譜的につながるとされる近世の額田部西村の機能、④中世の額田部郷・法隆寺郷・筒井郷と近世の地域的結合がどのように連続し、また不連続なのかという問題、⑤推古天皇社と額田部村との関係の確定、一般的な村神社でないことから、⑥残る史料所在確認調査、という課題を示して頂きました。それから浦西さんは宮座についての資料がなかなかきちとした形でつかめない中で、4段階の宮座の展開についての作業仮説を基に、どういう所で材料を補充していくかということについての指摘があったと思います。それでおふた方の成果と課題についての報告につきまして、忌憚のないご意見をお願いいたします。

石上 村の移動ですが、村の人達は板屋ヶ瀬から丘の上に移ってきたと伝えている。そうではないんじゃないかとおっしゃった。それはどうなんですか。

黒田（司会） 山へ登ったということですね。いかがですか。

吉田 前からあまり発展はないんですけど、ただ現在の浄化センターあたりの丘が南になるような一帯ですので、その可能性は今のところ確認できないと思います。大和川の流路の問題もあると思いますので、あれは以前に高橋さんですか、残された地形のどの程度参考になるのかなと思っています。それ以上のことはわかりません。

黒田（司会） 石上さん、これ、どのくらい確実な話なんですか。

石上 地元の人はずいと言ってますよね、丘の上に住んでいる人は。自分達は下から上ってきたというふうに。池田さんもそんなこと言ったと思ったけどな。墓の位置から言えば、今の板屋ヶ瀬の集落の所の東北に六地藏のある墓がある。寺墓はそれぞれ浄土寺だとか融通寺だとか別にあります。墓と集落の鬼門のところに作るということで言ったら、墓の西南の板屋ヶ瀬の所に集落があったのかなあと了解していたんですけど。

吉田 近世以降も大和川の流路そのものが変わってますでしょ、色々。きちっとあとづけることはできないんですが、少なくとも今の川の流れていうのは昭和38年ぐらい以降の流れ、川床ですし、それ以前にもしばしば変わっています。現在の板屋ヶ瀬あたりにそれほど大きな集落ができるような大和川の元の川床というものを考えられないということと、それからあそこに熊凝村って地図に出てますね。南方が低湿地、洪水がしばしばなので、現在の場所に移ったんだと言われたら、それはそうかなと、先程言いましたように、南郷の耕地がずっと南の方に広がっていますのであるほどと思うんですが、池田さんというのは北の方ですね。ですからその伝承はちょっとどうかなとい

うことです。

石上 そうすると、例えば北の方は昔は熊凝村と言われていた……。

吉田 そのへんは小夙村との関係で、どうなるかわかりませんが、現在板屋ヶ瀬の集落が地藏堂の堂守をやるということから板屋ヶ瀬の集落ができていくということはある程度想定されるんですが、板屋ヶ瀬というのは一部は隣の窪田の東垣内から出ばってってますね。それがたぶん小夙村であり万歳村なのかと思いますが、そういうことで現在の板屋ヶ瀬の集落そのものは、混住地というか色々な形で出来上がってますので、現在の形からはなかなか想定がつかないんです。あるいは現在の村を元熊凝村と呼んだんだということになると、ちょっと歴史的には後追いできないとすれば、そうすると南方は元熊凝といい、それが洪水等を避けて、現在の自分たちの領域のいちばん北の端に集落を移したということは想定できると思うんですが。ただ北の方はそうでもないだろうと思いますけれど。

黒田（司会） 石上さん、とりあえずよろしいですか。

石上 それと推古神社の成立とは関係あるのかなと思ったんですが、そういうことはないですか？

吉田 推古神社が先程浦西さんのお話にもあったんですが、村の氏神か寺の鎮守かという事で争論があるという事と明細帳にあれだけ出てくると、宝永3年（1706）から初めて村の氏神になったんだという、それらの関連が私もうひとつわからないんですけど。近世の段階で村の氏神の帰属をめぐる争いが起こるというのが、ちょっと理解できない。よくわからない。だから宝永3年の史料は史料紹介の欄に入れてまた色々な形で批判を受けるか、検討してもらいたいと思っております。

黒田（司会） 浦西さんはその件についてはいかがですか。

浦西 これは史料自身の表れ方の問題で、寛保3年（1743）の村明細では神社は村持というふうに解することができ、そして額安寺の縁起に、これは額安寺の鎮守と読みとることができ、江戸時代の初頭ぐらいから宮座を成立させた人々が自分たちの神社だという主張と、それと額安寺の寺側の主張とが平行線を辿っていたような印象を受けてます。これは何もここだけではなくて、奈良盆地の各地にそういう現象が起こる可能性があったんだろうと考えています。額安寺は10石ほどの朱印状をもらい、住職は必ず存在しますので、寺院の鎮守だという主張が宮座の祭祀組織を持つ村人との対立になる。他の村落では、朱印をもらってないお寺は衰微してしまっ、村人の共有地になるという流れは、僕は室町時代中期くらいから、そういう現象が起こって、そして江戸時代に世情が平和になった時期に最終的な神社の所有の確認された記録がこういう形で残っているんじゃないかなという想定をしているんです。文献では江戸時代の初頭のいざこざっていうんですか、どちらも主張している記録しか残らないけれども、宮座の人々が自分たちの神社だと主張して額安寺から独立してゆく。その背景には江戸時代の宗教政策である京都の吉田家から裁許状を貰う神主とか神社の名前とか色々なものが関連してくるんだと思うんですけども。

黒田（司会） わかりました。他にご質問がありましたらお話し下さい。はい、どうぞ。

狩野 吉田さんがおっしゃった額田部新町の推移という点で、在方と町方の関係についてはもうひとつ事情がはっきりわからないんだというふうなご意見だったけれども、今現在、吉田さんはそのことについてどんなふうにお考えになっているのかを少し展開して頂けたら有り難い。もうひとつ

はお二人に、もしもそういうことで何か考えられることがありましたら教えて頂きたいんですけども、額田部の集落というか、この丘陵上の集落と矢田丘陵、とくに松尾山とか金剛神社とかいくつかありますけれども、これらは額田部の集落との関係ではなく大和全体とかあるいはもっと近畿全体と関わり合いを持っている大きな神社でもありますから、特別な関係というのはないのかもしれませんが、とくに額田部の集落との関係が何かあるような事がございましたら教えていただけますか。

吉田 あとのほうはよくわかりませんが、最初のほうにつきまして、つまり会ヶ峯新町の形成理由とかにつきましては、ひとつ考えておりますことは、会ヶ峯という所が相給の領主の誰のものなのかという事がもうひとつわからないんです。ただ、小林という先程の新池の東側の森の屋敷にいた人々は、土屋領の庄屋なんかやりますので、まあ土屋領かと思うんですが、ただこの時代の相給の場合の耕地割というんでしょうか、これがどうも田一筆ごとに分けているという分け方ようです。従いまして、ここからここまでは誰で、ここからここまでは幕領というふうにはならないと思いますので、その辺のところもちょっとわからないので、そこはちょっとおいとかなければいけないんですが、ここは中世から交通の要路でして、浄土教なんかの広がりの中でも、ここで浄土説法会を開いているようなこともありますし、近世に入ってからですが、芝居興行なんかはここで行われているという、そういうようなことで南北交通あるいは東西交通の要路だったというようなことが、ここに新しい町場が作られてくるひとつの理由だろうと思います。それからもうひとつは、その後に入ってきた会ヶ峯の新町に、つまり新町の住人として後でこの地域に入ってきた小林という家が、板屋ヶ瀬の浜の経営者として非常に大きな役割を果たしております。問屋をやっているということではないようなのですが、とくに大阪から上ってくる醤油であるとか、鰯節であるとかという、そういう様々な商品を陸揚げして、それをどうも郡山藩等へ持っていつている痕跡がある。これは小林家の文書から出てくるんですが、そういうふうな商業ルートですか、そういったものを確保していくために設定された、まあそこらへんの関係はよくわからないものですから、そこらへんはいい加減になってしまうんですが、そんなことでできたんだろうということですね。それはどうも中世から近世にかけて、まあ近世にかけてちょっと違って来るかもしれませんが、中世の終りぐらいまでの額安寺の経営する時代とも関わるのでしょう。先程の筒井党と額安寺が近世に入っても土着した安堵氏とかあるいは窪田の石田・中氏、そういう家と深く関わり続ける。この地域にある種の筒井党の影みたいなものが残っている。そうしたことがやがて会ヶ峯新町につながっていたんだろうと。こういうような仮説にもならない程度のもを持っているんですけど。

狩野 額田部新町っていうのはどの辺にあったの？

吉田 池がありますね。船墓の前、東池ですか。東池の真東からずっと東になる、丘陵上に道がありますね、あの道の左右。

狩野 この図面からちょうど抜けた所ぐらい？

吉田 ええ。だから23とか22とか、その上にちょっと大きなお家がありますね。これが小林さんというんです。それから23番のあたりから東に下がります。

狩野 この道が東西交通の？

吉田 ええ、前の道が。

黒田（司会） 南北の交通というのはどこ？

吉田 南北の交通は、たぶんそこで船墓へ行って、左に曲がっていくみたいですね。それから右へ曲がる道があります。

黒田（司会） それでは他に質問があれば発言して頂きたいと思いますが。

吉田 先程もちょっと色々付け加えた中で言ったんですが、この村は先程の推古神社、推古天皇社と村方との関係も含めまして、どうも大和盆地にある一般的な村の通常の在り方とはだいぶ違うような集落の広がり方があるようです。例えばはるか離れた板屋ヶ瀬という所に出張村、枝郷を持ったりするということもありますけれども、領主がいっぱいいるというのも単に偶然にここに細かい領主がいっぱい置かれたのか、単なる郡の端なので置かれたのか。たぶん郡の端なので細かく割れたんだと思うんですけども、そのへんのところが中世をどういうふうに受けているのかということで、先程の課題の4番目ですね、4番目の問題とどう関わるかわかりませんが、ものすごく面白いところであろうと。

黒田（司会） お二方にお聞きしたいんですが、分家とか本家とか、そういうものの移動関係についての図式化みたいなのは地域に即してはできてるのでしょうか。つまり先祖を追跡していったら1軒1軒について、例えばどこが本家でというのを確かめていった時に、ある種中世の末期ぐらいまで、ある家の本家関係というのかそれは絞込みするんじゃないかというふうに思うんですが。そういう作業というのはあんまりやっても意味がないでしょうか。

吉田 いや、今おっしゃったのは、近世史のほうでいちばん重要な、例えば家の問題、歴博でも前におやりになりましたね。

黒田（司会） それはできません？

吉田 いや、この村でできるかどうかかわからないんですが、この近くの周辺の村ででしたらできるんです。今おっしゃったいわゆる近世的な家の成立過程がきちっと追いかけられる所もあってね。それは先程の宮座の問題とも深く関わって、従来は14世紀の半ばぐらいにできてくるという、そうすると宮座の成立が、浦西さんがおっしゃった2番目の問題がだいたいその頃にやってくるわけなんです。それはやりたいですね。ここでやれば、宮座との関連で面白いなと考えています。それがやっぱり中世から近世への移行の問題とも関わるんですけど。ここでできるかどうかわかりません。その隣だったらできますけれども。

黒田（司会） 集落移動についてある程度例を他に見いだすことができるのでしょうか。下から洪水や何かで丘陵地帯に上ったという……。

吉田 それはもう、この大和川流域にはいっぱいそんな話はありますし。

黒田（司会） そうすると、額田部の所もそういうふうに理解しても一向かまわないという可能性があるのでしょうか。

吉田 ただ北の方がということになるとちょっと話が違いますけれど。あの和歌山の南岸の方には第1と第2の浄化センターがありますが、第2の浄化センターの近くにありました集落は、たしか沢という集落は南向きのいちばん北の方に低湿地の南向きのいちばん北の方に移ったという、それは伝承じゃなくて文字の問題とか含めて確かめられることですが、そういう例はあります。

石上 あの額田屋敷という字が寺の裏にありますね、真裏の所に。今、空地になってるかと思うん

ですけど。額田部氏っていうのは結局、額田屋敷という字があるから後代にまで続いているのかなと思ったら、続いてないわけですね、全然。

黒田（司会） 今後の課題としてちょっとチェックしておいていただけませんかでしょうか。それでは時間がきましたので、このへんで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

④……………考古学・地理学からみた額田部地域

前園（司会） さきほど金田先生のほうからお話のありました、大和国の条里プランと額田寺伽藍並条里図という話、これは大和国の条里プランの完成の時期、ひいてはその額田寺の条里図がいつ出来たかということとも関わってきますが、そのへんのお話をうかがいました。そのほうからちょっと、考古のほうは少しあとにして、さきに金田先生の話についてのご意見から何かありましたら、どうぞどなたか？

狩野 大和盆地の全体の条里プランみたいなものが出来たのは、さきほどのお話では条里称呼を含めて8世紀中頃から8世紀後半頃、僕もそのぐらいの時期だというような気がしています。そのことと個々の論文でも引用しておられる考古学的な所見で、条里地割が11世紀とか12世紀とかいうふうな段階にならないとちゃんとした形で検出できない。それも金田さんはその通りだとおっしゃる。そのことと8世紀の後半に全体の条里プランが出来あがったということとは矛盾しない訳ですか。それについてはどんなふうに考えておられますか。

金田 それは矛盾しないと考えています。というのは、8世紀にもそういう地割は作られているだろうと思うんですけども、たくさん検出されているわけではない。ただ、考古学的に全面発掘された訳じゃありませんから、ありうるだろうと思うんですが。ただし8世紀の段階では全てが12世紀の段階のような形の地割、畦畔とか道とかそういう形で必ずしも作られていなかった可能性が高い。つまり土地を管理するためのユニットとして、校班田のたびごとに確認をするような区画の存在ではあったでしょうけれども、必ずしも道や溝なんかとして完全にきちっと作られていたものではなくても充分機能しえたであろうというふうに思ってます。例えば田んぼや道などが、必ずしもそういう条里、8世紀の後半に出来た条里プランにきっちりそって作られていなくても、それが校田のたびに再確認できる状態であれば良い。最低限、例えば極端な話が、下ツ道から竿を立てて測って行って確認できればいいと。

狩野 そのことと12世紀の段階で考古学的に確認できる条里地割というものとはどう違うの？

金田 それについては、律令の条里プランと、国図の条里プランと、荘園の条里プランという、少なくとも大きく3段階の条里があるという、訳がわからへんと言われそうな議論をしています。要するに律令の条里プランというのは、土地管理システムとして存在していて、もちろんそれに合わせて地割が存在していればいちばん有効な訳ですから、そういう方向には動いているんですけども、まだ地割そのものは完全に完成している訳ではないという段階が律令の条里プラン。それが国図の条里プランの段階では、権益とかに密接に非常に強く絡まるようになりますので、その段階でおそらく条里地割の形成が急速に進むであろうと。それが10世紀頃から、要するに受領国司の時期からということですが、その状況が大和の場合ですと延々と続きます。そういう条里プランの規模とし

ては個別の荘園の単位ではなくて、大和全体のものとしてずっと続いていく訳ですので、それがどんどん進んでいくことになります。どこで切るかという問題がありますけども、10世紀あたりぐらいいからのことであろうというふうに考えてはいます。ただ、それで全てを説明できるかどうかということに自信はありませんが。

狩野 あのね、条里制研究会でもそのへんは少し議論したことがあるのですが。つまり、条里遺構というものの確認、考古学的な方法での、ということだけの認識で良いのか。つまり考古学的方法の限界ということもあるわけだ。条里遺構というものの検出ということについていえば、畦とか溝とかは、前のものを壊して何ぼでも作れるわけです。それがずっと以前に作られた時からのものが続いているというふうに考える考え方だけで良いのか、という問題もやっぱりあります。だから考古学の成果は成果として大事なんだけれども、そういうふうに金田さんのようにそれも受け入れるような格好で、条里プランというものがどんなふうに進んでいったのか、というふうな見方だけで良いかどうかという問題は僕はあると思うね。

前園（司会） ちょっとそのことについて、私が知っている限りのことをお話ししますと、最初ですね、榎原考古学研究所の中井一夫君が目にしたのはもうだいぶ前です。

石上 15年ぐらい前ですね。

前園（司会） 彼がそれを言い出したのはどういうことだったかと申しますと、盆地の中を非常にたくさん発掘調査を行っていたんですよ。そして彼がいちばん最初に気がついたのは、条里遺構、里堺とかそういうものが出てくる所を狙って彼はずっと掘ったんですけど、なかなかそれはわからない。狩野先生がおっしゃたように今でもほとんどわからないし、遺物が出ないですね。溝が出たとしても、時代を決める遺物が見つからない。ただ、ここ迄は遡らないということがいえることは、非常に大きな河道が見つかるんですよ。自然の河道が。盆地の中は今江戸時代以降だと思うんですけども堤防をつくり、流路が決められている。それ以前というのは非常に多くの暴れ川が流れ、その中から平安時代の終わりから鎌倉ぐらいの初期の土器といったものが大量に出てくるんですよ。その川の中から。その上に条里遺構がある。それで最初にこれはおかしいと思ったわけです。そういうのが盆地各地で見つかっていますから、少なくともその発掘調査した場所においては、現地の条里はその土器よりも後だということは絶対いえると思います。それが、だいたい平安の終わりぐらい、11世紀から12世紀か、その時期のものが非常に多いという……。

狩野 どの程度普遍化できるかね、全体についてね。

前園（司会） ただ、今の条里の場所にはおそらく元の条里があったでしょうから、それが流されてもね、また向こうに残ってるからそれをつないでいって、それを何度も何度も修正しながら現在も続いていると思いますから。やっぱり成立は金田さんのおっしゃったものになると思います。そういう過程を経ながら何度も何度もやっていって完成したものが今の条里。

金田 ちょっと一、二追加させて頂きますと、実際の地割ということからいいますと、考古学的に発見されるタイプの地下の遺構の他に、私は地下げをしながら地割を維持するタイプの条里地割があると思います。前に事例を挙げて報告した若槻池のすぐ東側の所で、南北方向の道路敷の調査があったんですが、地表で見るとほとんど同じ条里地割が続いているんですが、若槻池の東南の方は1メートル以上下に中世の11～12世紀の川があるんです。その上に条里地割がある。そのすぐ北側

の若槻池のすぐ東側の所では、条里の地割が6世紀の古墳時代の終わり頃とほとんど同じ面を削る形である。ですから原形はどうか分かりませんが、仮に原形の地割があったとしても、片一方は削って平坦化しながら、同じ地割の線を下へ降ろしてきている。そして片一方は積み上げているという状態になりますから、そういう垂直方向の重層性を意識しないと、つまり垂直的な重層性の中には単なる積み上げだけじゃなくて、別のタイプがあるんだということを注意しないといけないのではないか、ということもちょっと書いたこともあるんですが。それが1点です。それから、もうひとつは非常に面白いケースですが、ちょっと数字を忘れてしまったんですが、横田荘の土帳があるんですが、これも中世のものですけれども、それには一筆耕地の形状と思われる縦横の線が入れてあります。区画ごとに東西ないし南北の。それが、ある部分は現在のものと合いますけれど、ガラッと向きが変わっている部分もある。ですから横田荘の土帳に書いてあるのが正しいという前提での話ですけれども、あれが正しいとすれば、例えば中世と現在とでも方向までガラッと変わるケースがあることになります。

狩野 地割ってというのが、要するにちゃんと一筆の大きさ……。

金田 そうです。碁盤目の枠の中での問題ですけれど。それから奈良盆地の地籍図の、大和国の条里復原図の調査を私達は実際に市役所でやったわけですが、その時なんかでも非常に痛感したのは、地籍図の段階でもまだ非常に不規則な地割形態なのに、現在は非常に整然としたものが実際にある。つまり明治以降にも条里地割を作っている、そういうケースもあるということです。だから考古学的な対象の時期だけでなく、近代に入ってまでこうやっている。条里地割はそういう非常に厄介な生きてるものです。古墳のようにある段階で死んでませんので、ずーっと生きてますから、動き続けている、大変厄介なものだというふうに思っています。

狩野 いま我々が和歌山盆地の現地について確認できる条里地割というものがずっとそういう8世紀に遡るとか、そんなものとは思わないんだけど、ただそのへんの違いみたいなことが、生きてるって違いが、何か田んぼの維持経営とか管理とかいうふうなことについて違った考え方の方法とか、そういうものが導入された結果、今日のような地割が展開しているとみるのか。そりゃ、部分的には畦畔やら水路やら随分違ってると思うからそうなんだけれども、しかしやっぱり条里制とか大和盆地全体の条里地割みたいなものは8世紀の後半に発生したことは間違いない訳だから、それ以降の変化をどんなふうに意味づけするのか。あなたのおっしゃる3段階か何かね。

金田 いや、実は3段階の後にまだあるんですけどもね。私はそういう条里そのものの機能を、少し分けてみる努力をしているんです。これは古典的にはヨーロッパの村落の集村の成立プロセスのアナロジカルな見方というのが初期の段階では非常に強くて、長地型や半折型というのが犁との関わりがあるとか、あるいは条里の区画がドイツの集村のゲバンなんかに対応するとか、いわゆる三圃式農業のオープンフィールドですが、それに対応するとか、色々なヨーロッパ村落の変遷のアナロジカルな見方がかつては支配的でして、農業構造の変化がなければ、地割形態が変化しないんだというのが一般的な暗黙の理解だったと思うんです、かつては。そうではなくて、それを別な意味で多少説明できないかというふうに考えています。土地管理システムとかの形での問題がひとつの説明の発端になるのではないかとということで、言い始めている訳です。もちろん、それだけで充分だと思っているわけじゃないんですけども。形態としては同じ枠組みなんだけれど、それが果

たしている機能が少しずつシフトしていったら違ってくる。それに対応して、集落形態の変化も進行しているんだというのが私の基本的立場です。

前園（司会） 他にどなたか。

仁藤 今のお話に関連するとは思いますが、大和盆地の中央にある、基本条里以外の周辺の条里がございますね。それらの成立年代もほぼ同時で宜しいんですか。帳簿上は何条何里って書いてあるけれど、実際にはありそうもないようなところは結構ありますね。

金田 ええ、あります。

仁藤 それは最後まで条里施行がないということで宜しいわけですね。

金田 基本的にはね。ただ、問題は実際に傾いた条里がある時がありますね。それは大きく分けて2種類あって、元々そういうふうになるのを無理やり一連のものとしてみているケースと、実際に地割が出来た段階で現実に合わせて出来たっていうのと2種類のパターンが、大きく分けてあると思います。

仁藤 坪についてはやっぱり平安時代のほうが、利用価値というか、帳簿上も坪というものをわりあい重視して文書面でも使うとか、そういうことはないですか。何条何里まではわかるとしても、何坪というような……。

金田 要するに渡辺澄夫先生なんかのいわゆる均等名という説ですが、均等名荘園体制といっているかどうか別にして、その段階で一定の土地管理を、その荘園の中の土地管理をああいう形で編成しているのは事実です。その時に、1反という整数の形で出てくるケースが非常に多いですね。それと、以前に条里制研究会の前段階かな、服部先生が報告になった件ですが、売券類なんかに出てくる1反、2反という単位も平安時代の終わり頃になると非常に多くて、その段階になると非常に現状の地割と合う可能性が高い。もちろん、史料の数は限られていますから、全体からすると考古学的な発掘例より最近は少ないくらいですが、それでも一応は1反、2反という単位で出てくるのを現地比定することが出来るという点からいいますと、今考えているようなプロセスに一応矛盾なく対応するということになると思います。ですから、土地呼称システムそのものは8世紀の後半にはもう確立しているけれども、個別の地割がどうこうというのは一応別の話で、もっと古いものも含まれているし、新しいものも含まれているという、そういう理解をしないと現在のところはしようがないんじゃないかと思います。しかし、狩野先生は、もうちょっと何とか説明のしようがないのか何とかしろ、という話だろうと思いますが。

狩野 あ、神護景雲元年（767）の太政官符は、たしかあそこの香具山の南のあたりの話だったね。岡本田とかあるものでしたね。

仁藤 大官大寺の……。

狩野 あのへんは後にはやっぱりちゃんとした条里呼称になるのかな。

金田 一応弘福寺のものがあの辺の山の周辺にたくさん出てきますね。あれがやっぱりちゃんと条里プランの形になってきますから。弘福寺領の寺辺の関係のものが。個別のひとつひとつの場所のはっきりわからないところがありますけど。

前園（司会） 何かそれにつきましてご意見がございますか。

黒田 いちばん初歩的なところを教えてください。初歩的すぎるかもしれませんが、ひとつはとく

に西側の所にたくさん古墳が描いてありますが、先程のお話で、合計この絵図に描かれているのはいくつだというふうに判断されるかということに絡むんです。実際に今の現状の調査で、ここにいくつぐらいのお墓があると数えられているかということがひとつ。それから坪の中で、船墓とか一連のものに囲まれた坪数で、五坪とか六坪、八坪、七坪とか山だけが描かれているような所については、将来的に古墳の検出の可能性があるかどうか、これが2番目。3番目がですね、ここに描かれている古墳の表現は古墳相互についてもそうなんです、大きさの比率とか比較、描き方にですね、ある妥当性があるかどうかです。つまり現実の例えば船墓なり狐塚なりに対して、この図に描かれているものは、向きあるいは形、そういったものについて実際を見た、あるいは現実の認識の上に立っての図として描かれているといえるのかどうか。あの石上さんの図に描かれている向きでいえば、前方後円の関係で船墓と狐塚は正反対の形なんです、この絵図上では同じ形に描かれていますね。そこらへんのところも含めて絵図にかかっている古墳の形と、現実にある古墳の形の比例関係も含めてどういう判断ができるかということを取りあえず教えて頂ければと思います。

服部 まず寺の西側の小さい古墳が描かれているところですけども、一応現地では来迎墓ノ間古墳群といっている所に該当するわけ。その古墳群はもう現状でほとんど残ってなくて墓石だらけなんですけれども、その墓地を公園化する前の測量図とかが残ってまして、それによるとたしか9基だったと思います。ところが図には全体で9基以上の古墳が描かれています。この小さい丸い表現が個々にどの古墳に該当するか、なかなか難しいところだとは思いますが、我々が知っている限りでは9基ということです。それから9基が知られているのは大和郡山市の領域の中なんですけれども、その西側にですね、浅い谷状の地形を挟みまして安堵町に入りますが、そこにも現在墓石が立ち並ぶような形で古墳が残っております。それがおよそ5基ですね。だから現在で把握できる数というのは全部で14基ほどになります。

それから、この丘陵での古墳の検出の可能性ということなんですけれども、今のところは新たに見つかっておりません。ただし、先程の前園さんの報告にもありましたように、お寺の発掘をやった時に整地土なんかから埴輪がたくさん出てきている例があります。ですから、この近辺で、場合によっては古墳を潰して造成工事とかされている可能性がありますので、もう少し古墳があった可能性があります。それは先程も言いました九条四里の十七坪の大きな古墳ですね、これが現状で地割として残っているとすれば、この大きな古墳も削平された可能性があります。来迎墓ノ間古墳群については先程9基が知れるということでしたけれども、実際はもう少し描かれているようですので、そういう小さい古墳もいくつか削られている可能性があります。それから額安寺の西側で発掘調査を行いまして、以前、垣内遺跡として報告させて頂きましたけれども、そこでも埴輪が出ております。ですから、ひょっとしたらもう少し古墳があって、それらが削られている可能性があるかとも思います。

それから、もうひとつは先程前園さんが言われましたけれども、この地域の7世紀、飛鳥時代の古墳、終末期古墳ですけども、現在のところ、それは見つかっておりません。どの程度の終末期古墳を想定するかによっても変わってくるんですけども、あまり大きな規模の古墳ではなくて、比較的小さな古墳だと考えられます。しかも終末期の古墳というのは、丘陵のてっぺんとか稜線上に墳丘を作るというものではありませんで、丘陵のあるいは山、尾根の南斜面に挟り込むような形

で墳丘を作るという傾向があります。いわゆる山寄せの古墳という形なんですけれども、そういうものですね、もしかしたらここにあって、場合によってはこの絵図を描く時にはもうすでにわからなくなっていた、そういう可能性も考えられなくはない。ただし絵図の作製された年代にいちばん近い時期の古墳ですから、もし仮に存在したとすれば、おそらく絵図には描かれるような感じがいたしますが、そのへんは何ともいえません。

それから例の大きさですね、図に描かれた古墳と現地の古墳、現況で知れる古墳を対比させた場合、その主軸の向きですとか描き方を含めて、形態上の問題、それから全体の大きさの問題なんですけども、例えば九条四里に前方後円墳の額田部狐塚古墳が描かれていますけども、狐塚は発掘調査がされまして、測量調査も実施されております。墳丘の全長が約50メートルだったと思います。この絵を見るとちょっと50メートルより大きいかとは思いますが、まあ、ほぼ合っているような気もしないではない。それから船墓古墳ですね、これはもう、今は後円部というか円形を呈する墳丘の一部が残っているだけで、全体の大きさというのはわかりませんので、大きさの比較というのはなかなか難しいかとは思いますが。それからお寺の北東にあります推古神社古墳なんですけれども、これは現況で墳丘が比較的明瞭に残ってまして、墳丘全長が約40メートルほど計測できます。ところが、この描き方を見ると、かなり小さく、15メートルとか20メートルぐらいになるんでしょうか。まあ、それぐらいの大きさに描かれております。これは前方後円墳であるにもかかわらず、一重の瓢箪形に描かれています。主軸の向きですけども、狐塚は前方部を南西に向けている訳ですが、これは図ではほぼ南北に描かれているということです。狐塚は北側に後円部を置いて南側に前方部を向けている訳です。それで船墓古墳も同じように、北側に後円部を置いて南側に前方部を置くという形状だと思うんですけども、この図を比較する限りにおいては、ほぼ同じような描き方になっているということです。ただし狐塚の場合は周濠と外堤を持ってまして、その部分については素地のままで彩色を付けずに、そこにたしか田んぼという形で墨書があったかと思えます。船墓の場合は丘陵上に位置してますので、周濠ですとか外堤という外部施設は考えにくいですが、まあ、二重の瓢箪形に描いているということです。その描き方の違いがどういう意味があるのか、ちょっと私、よくわからないところです。こういう描き方を見ると、推古神社古墳なんかも、二重の瓢箪形でもう少し大きく描いても良いんじゃないかという気がしないではないです。

黒田 その形の中でですね、来迎墓ノ間古墳群ですか、そちらのほうには変に形が三方に出っ張っているやつとか、ちょっとL字形になってるやつとかがありますが、そういうのは二つのあるいは三つのものがひとつにまとめて認識されているということですか、それともほとんどそれは意味のない表現なのでしょうか。

服部 描かれている限りは何らかの意味があるとは思いますが、通常こういう形の古墳というのは当然ありません。おそらく密集した形で群集墳というのは築かれますので、築かれてからこの8世紀の半ばぐらいに何らかの形で墳丘が若干崩れたりですね、隣の古墳と接触するような形になったのをそのまま描き込んでいるのかな、という気がしないでもないですが。それから、また古墳とは全く別のものを表現している、という可能性も何かあるかもしれません。

前園（司会） 他に何か。

金田 ちょっと確認をさせて頂きたいんですが、前園さんがさっきおっしゃったのは、瓦の編年で

ですね、資料の700年以後の線の下側の段階のものが、この額田寺伽藍並条里図に描かれている寺院のようなものであろうと。

前園（司会） 700年から下。

金田 下のもの、というふうなお話でしたが、その時期というのは8世紀に入って間もない時期なんでしょうか、それともその8世紀の、例えば先程から議論になるような半ば以降ぐらいまで下がる可能性があるのでしょうか。ちょっとそのへんを教えて頂きたいと思うんですよ。

前園（司会） 細かい年代は瓦だけで、土器はほとんど出てないもんですから議論はできないと思うんですが、一応25年単位で考えてるんですけど、8世紀を分けて第1四半世紀から第2四半世紀、中心は第2四半世紀、だから後半までは下がらないと。

金田 後半までは下がらない。わかりました、ありがとうございます。

石上 質問ですが、前園さんが発見されたA（資料編 p.44-38）は西の方の伽藍の中で発見されたのですか？

前園（司会） これは、前に発掘調査の概要をお話した時に使った資料にありますが、現在の門を出ましてね、西へ行くと地藏さんがありますが、あそこに中世の土塁が残ってる。あの土塁の外側で、あの南にはグラウンドがあるでしょ。あそこのグラウンドを作った時に東西方向にトレンチを2本入れたんですよ。そのトレンチの中に築地の外側の、中世の空堀だと思うんですけど、その堀が確認された、その堀の中にありました。中世の遺物と混じって出た。だから後で混入したものだと思いますけれど、境内の中心伽藍の中ではない。

石上 あの、言われたのは場所が重なってる可能性はあるのですか？ つまり7世紀初頭の精舎と8世紀に再建された寺院……。

前園（司会） いや、おそらく隣接はしてると思いますけれど、古いものがあったとしても、今の中心伽藍と重なっていると思いますから、それを考えると外にないと思いますよね。隣接地域だと思います。

石上 7世紀後半期の瓦がいくつもありますよね。

前園（司会） はい、あります。

石上 これらの表採品なんだろうけれども、これらはどの辺から？

前園（司会） これはですね。B1（資料編 p.44-40）というのは私が発掘したもので、これは先程言いましたAと同じ所で発見した。他のE（資料編 p.45-52）とかD（資料編 p.45-53）というのもそのトレンチから出たのもありますし、境内地から出たのもあります。ただ、絶対量はこの700年以降のものとそれ以前のものとはいぶ違います。それと今日お話しませんでしたけど、もうひとつ、やはり13世紀の後半ぐらいを中心にした瓦が結構たくさん出ました。忍性の時期だと思うんですけど、だから中世のその13世紀後半ぐらいの瓦窯がありますよね、北側に。その時期に非常に大きな手が入っているんじゃないかなと。だから8世紀の前半と13世紀代、そういう時期が非常によく動きのあった時期だと思います。

石上 そうすると、650年から700年の間の時期というのは、7世紀初頭に作られた何らかのものに関わるものが拡散して方々から出ているというわけですか？

前園（司会） そういうふう理解してますけれども。

石上 8世紀の瓦というのは、西の方とかそういう所から出てこないのですか？

前園（司会） 今のところ、出てません。

狩野 その寺の伽藍の中心軸は、南北方位のものだろうということを言われました。これは発掘の所見で？

前園（司会） いや、発掘の所見ではありません。建物が検出されていませんから。ただ原地形とか伽藍図とか、それからその後の資料たとえば江戸時代ぐらいの古図なんかありますよね、それなんかも入れて、今とさほど変わっていないというふうに考えています。だからさほど根拠はない。これという確たる根拠はないですけども。奈良時代の他の地域でもどこでもそうですけれども、中軸線はほぼ条里に合ってますから。7世紀代のものはそうじゃないですよ。8世紀以降のものは合っています。

狩野 前園さんのそういう寺の伽藍の考え方は、古代の寺院は南北方位をとるものである、という考え方によるわけ？

前園（司会） いや、それは奈良時代以降っていう。それ以前はそうじゃないですから。

狩野 それ以前はそうじゃない？

前園（司会） そうじゃないです。例えば若草伽藍にしてもそうですし、古手のものは中宮寺もそうですし。東院も西院も基本的には奈良時代になると条里に合った方位をもつものが一般的になる。

狩野 従って、この絵図に描かれている寺は南北方位のそれであると……。

前園（司会） はい。まだ話はあるかと思いますが予定の時刻がまいりましたので、そろそろこのあたりで。